

平成十六年三月 現代密教 第十七号 抜刷

身と心の歌

高
橋
秀
城

身と心の歌

高橋 秀 城

はじめに

智山伝法院では、平成十四年度より「身体と欲望」という総合研究テーマを掲げ、新しい身体論を構築しよう
と研究会を重ねている。これまでに、二度にわたる講演会を開催し、また、昨年六月の第五回智山教師総合研
修会においては、「身体を問い直す―現代における即身成仏の意義」と題しての、意見発表・パネルディスカッ
ションを行った。現在は、弘法大師空海（七七四―八三五）の『即身成仏義』を読み進めながら、「即身成仏」を
現代にどう展開させていくかが討議されている。

本稿では、こうしたテーマに関連して、文学、特に和歌において、「身」や「心」、そして「即身成仏」がど
うに詠まれているかを考察する。「即身成仏」を題にして詠んだ歌は数少ないが、それらを解釈することによ
り、文学の側から「即身成仏」を見つめることができると考えている。

一 歌の姿

我が国最初の勅撰集である『古今和歌集』（九〇五年成立）の仮名序は、「やまと歌は、人の心を種として、万の言の葉とぞ成れりける」という言葉で始まる。「人の心」は千差万別であり、そこからさまざまな言の葉が生い茂るといっているのである。

和歌は五七七七の五句三十一文字から成る。上の句（五七五）を本、下の句（七七）を末と言うが、その他にも、第一・二句（五七）を頭の句、中間の第三句（五）を腰の句、下二句（七七）を尾の句などと言うことがあり、その場合特に腰の句が重んじられた。心を因（種）として立ち現れた和歌の姿を、からだ全身に見立てているのである。

では、実際に「身」や「心」は、和歌の中でどのように詠まれてきたのだろうか。そこで取り上げたいのは、平安時代末期に活躍した歌僧西行（一一八一—一九〇）の詠歌である。家集『山家集』には、「身」「心」といった歌語が約三十首にわたって見られ、西行がこの歌語を好んで用いていたことが知られる。例えば、次のような歌がある。

よし野山こず糸の花を見し日より心は身にもそはず成りにき⁽²⁾

（山家集・春・66）

生涯桜を愛した西行は、春になるとしばしば花に心を奪われた。この歌では、花を思うあまり、心が身から離れ、吉野山をさまよい歩く姿が詠まれている。

いかでわれきよくくもらぬ身になりて心の月のかけをみがかん

（山家集・雑・904）

この歌からは、清く曇らない身となつて、悟りの境地を求めようとする姿がうかがえる。先ほどの、身体から遊

離する心とは異なり、心の中に宿る真如の月が詠われている。

また、「身」「心」とともに「言葉」が詠み込まれた歌もある。

三重のたきををがみけるに、ことにたふとおぼえて、三業のつみもすすがるるこちしければ
身につもることばのつみもあらはれて心すみぬるみかさねのたき
(山家集・雑・1118)

この歌は、西行が大峯山中で修行した若い頃に詠まれたものと思われる。詞書には、三重の滝を拝んだところ、尊く感じられて、三業の罪も清められる心地がしたとある。歌では、「我が身に積もった言葉の罪も、三重の滝によって洗い清められて、心が澄み渡った」と詠んでおり、第一句に「身」、第二句に「ことば」、第四句に「心」とあるように、身口意の三業が詠み込まれている。第二句に「ことばのつみ(言葉の罪)」として、口業の罪を詠んでいることから、西行の心の根底には言葉というものに対する罪障意識があったのだろう。それは、歌人であった西行にとって、他の身業や意業と比較して、ことさら強いものであったと考えられる。

では西行は、生涯にわたって、口業の罪を抱いていたのであろうか。晩年の言葉として、次のようなものがある。
この歌、即ち是れ如来の真の形体なり。されば一首読み出でては、一体の仏像を造る思ひをなし、一句を思ひつけては、秘密の真言を唱ふるに同じ。我れ此の歌によりて法を得ること事あり。若しここに至らずして、妄りに此の道を学ばば、邪路に入るべし
(『梅尾明恵上人伝記』卷上)

身と心の歌

これは、年若い明恵(一一七三—一二三二)に語ったとされる歌論である。これによれば、西行にとつて、和歌の姿はそのまま仏の真実の姿であるという。和歌一首を詠み出しては、一体の仏像を造る思いをし、一句を心に思い続けることは、秘密の真言を唱えることと同じである。言い換えれば、和歌を詠ずることは真言陀羅尼を誦することであり、和歌を思い続けることは仏像を彫刻する心そのものであると語る。つまり、そうした「心」

と「言葉」によって形作られた和歌こそが、私の身体そのものであると言うのである。⁽⁴⁾

この言葉には、身口意の三密が合一した境地がうかがえ、若い頃に感じていたような罪障意識は見られない。西行は、生涯にわたって自己の「身」や「心」を見つめ続けることにより、和歌を創作することがそのまま三密修行であるという、究極の境地に辿り着いたのであった。⁽⁵⁾

西行の歌論に語られていた和歌陀羅尼観は、後世の僧侶歌人たちに流布し、やがて定着していくこととなる。⁽⁶⁾そこで次に、西行以降の真言僧侶に焦点を当て、どのような「身」と「心」の和歌を詠んでいるのか考察してみたい。

二 『続門葉和歌集』の「身」と「心」

『続門葉和歌集』^{しよもんようわかしゅう}は、鎌倉時代初期、嘉元三年（一三〇五）に成立した私撰である。醍醐寺報恩院に住む二人の稚児が歌を撰び、憲淳（一二五八—一三〇八）という僧侶が監修した。全体は、四季・恋・雑・釈教・神祇の五つの部立に分類されており、憲深（一九二—一二六三）や頼瑜（一二二六—一三〇四）など、醍醐寺関係の僧侶の歌、九九三首が収められている。寺院で撰ばれた歌集として注目されるもので、当時の醍醐寺歌壇の様相を知ることができる貴重な資料でもある。

さて、この歌集の中で、「身」や「心」といった歌語はどれほど詠まれているのであろうか。試みに数えてみたところ、全九九三首中、「身」は百二十七首、「心」は百三十三首に見え、そのうち、「身」と「心」の双方が含まれている歌は十九首であった。全体の二三%弱に「身」が詠み込まれていることになり、他の歌集と比較しても高い割合と言える。⁽⁷⁾

身と心の歌

では、さらに細かく、部立ごとに見てみるとどうであろうか。「身」と「心」、そして双方が詠み込まれている歌の出現回数を纏めてみたものが次の表である。

この表を見て気付くことは、「身」は恋歌と雑歌で用いられ、「心」は恋歌と釈教歌に多く詠まれているということである。特に、釈教歌での「心」の割合が高いことが注目される。また、「身」と「心」の双方が見られるものは、多くが恋歌と雑歌であり、釈教歌は一首のみである。

先ず、「身」の歌を見てみよう。多くは、「身」「我が身」など、自己を指す意として使われている。その次に多いのは、「憂き身」(92)「身の憂し」(240・494・561・681・701・703・719・748・803・804・809・810・822)、「身の程のうき」(795)、「うかりける身」(801)など、我が身の辛い心情を詠み込む歌であるが、中には、

いづくにか宿もとめまし世の中にうき身はすまぬならひなな
りせば
(雑下・841・前大僧正聖兼)

のような歌もある。「憂き身」は、「澄む(住む)」ことができないという道理を、冷静な眼差しで見つめており、出家者ならではの境地といえよう。その他にも、

部立 (歌数)	歌番号	身	心	身と心
春歌上 (80首)	1 ~ 80	0	3	0
春歌下 (61首)	81 ~ 141	5	5	0
夏歌 (66首)	142 ~ 207	2	6	0
秋歌上 (100首)	208 ~ 307	6	6	1
秋歌下 (75首)	308 ~ 382	6	8	1
冬歌 (103首)	383 ~ 485	3	2	0
恋歌 (157首)	486 ~ 642	19	29	7
雑歌上 (106首)	643 ~ 748	17	8	2
雑歌下 (150首)	749 ~ 898	42	14	7
釈教歌 (79首)	899 ~ 977	7	30	1
神祇歌 (16首)	978 ~ 993	1	3	0

身のうさをのがるる道に入りぬれば人のためにぞよをいのりける

(雑下・822・権律師義俊)

のように、辛い俗世を逃れ出家し、世の人の為に祈る歌や、

かずならぬ身のうきほども身にすれば人のつらさも人のとがかは

(恋・560・権少僧都経乘)

のように、「人」(恋愛相手)と「数ならぬ身」(とるに足りない自己) (565・612・833) とを対照させながら、己の「憂き身」を知ることによって、相手の苦しさも自分のものとして感じられるようになるという歌も見られる。

また、「老いぬる身」(174)、「老が身」(377・789・791)、「我が身の年」(793)など、自分の年齢を自覚し、年を重ねての慨嘆や、「うづもるる身」(460・461)のように、地中に埋もれた植物と自身の境遇を重ね合わせるものもある。その他、「露の身」(838・839・852・977)など、露のようにはない我が身を詠み込む歌が見られ、

露の身のきえなん後は功德池のはちすのうちを家とこそせめ

(釈教・977・前大僧正定海)

などは、現世のはかなく消えやすい我が身と、来世の極楽往生での姿が対照的に詠まれている。

次に、「心」の歌を見てみよう。先ず、『続門葉和歌集』の序文は、「夫二儀之初、清濁漸分、三才以来、歌什盛起、所以者何、有人倫必有心情、有心情必詠歌什」で始まる。人間が存在する以上、そこには必ず、心情があり、心情があるからこそ多くの和歌が詠まれるというのである。『古今和歌集』仮名序に見られた「人の心を種として」という言葉に通じるものがあるだろう。『続門葉和歌集』には、「心の色」(84・103・492)、「心の奥」(68・905)、「惜しむ心」(343・975)、「通ふ心」(441・498)、「慕ひし心」(545・568・575)、「心の底」(749・970)、「飽かぬ心」(351)等々、「身」の用法以上に、変化に富んだ用例が見られる。

『続門葉和歌集』の「心」の歌は、恋歌と釈教歌に多い。例えば、恋歌では、「思ふ心」(573・598・606)、「心尽くし」(512・513・515)など、心惹かれる相手を慕ってさまざまのことを思い浮かべる内面的変化が詠われる。面

白いところでは、

恋といふもじのつくりのいかなればしたの心のくるしかるらん

(恋・641・実禅阿闍梨)

という歌もある。「寄文字恋」という題が付いており、「恋」という文字の、下に付いている「心」に対して、「苦しいことだろうよ」と思いを寄せている。漢字の作りを詠いながら、表面に表れることのない自己の「下心」(心の奥底)が掛けられているのである。

釈教歌とは、仏教の教理や仏教的心情を詠んだ和歌を言うが、『続門葉和歌集』釈教歌では、実に四首に一首が「心」を詠み込んでいる。経疏類を詠ったものが多く、例えば、

菩提心論の自心如満月といへる心を

たづぬべき月はほかにもなかりけりころのうちのすむにまかせて

(釈教・926・寂静院孫鶴丸)

などは、詞書にあるように『菩提心論』の経文の意味を踏まえ、心の中にある満月を詠ったものである。他にも、『法華経』『華嚴経』『大日経疏』『十住心論』などの経疏類が詠まれており、特に『菩提心論』(900・901・926)や『十住心論』(962・963・967・970・971)の歌が多い。これは、真言寺院である醍醐寺で編纂されたことによるのである。『続門葉和歌集』釈教歌の特徴といえよう。

最後に、「身」と「心」の双方が詠み込まれている歌であるが、恋歌と雑歌に集中している。

世をうしと思ひもいれぬ身にも猶秋は夕ぞころうかるる

(秋上・264・阿闍梨経淳)

秋の部にある一首だが、苦しい世の中を思い入れない我が身と、秋の夕暮れになると感傷的になってしまいう心とが取り合わされている。

こころをば人にとどめて帰るさの身にそふものは涙なりけり

(恋・523・権少僧都勝玄)

おもふぞよまたこむよまでうつせみの身をばかへてもおなじ心に

(恋・611・三宝院千手丸)

一首目の「こころをば」の歌では、恋人との後朝の別れが詠われる。愛する女性に思いを留め、この身は涙とともに離れるのである。また、「おもふぞよ」の歌では、「空蟬(現身)」のはかないこの身と、たとえ来世で生まれ変わっても思いは変わらないという、一途な心が詠まれる。

春は猶身をすててすむ山里も花に心ぞあくがれてゆく

(雑上・656・権少僧都仙覚)

もみち葉の色に心はとまりけり身をあきはつる山のおくにも

(雑上・735・道証法師)

雑部に収められているこの二首には、俗世を厭い出家した身であっても、山里の桜や紅葉に心を奪われてしまう心情が詠まれる。先に見た、西行の遊離する心と近いものがあるだろう。

「釈教歌には、次の一首のみが見られる。

かりの身のしづむをなにとなげくらん心の水のすみだにもせば

(釈教・939・権律師定叡)

「仮の身が世に埋もれていることをどうして悲しむのだろう、せめて心だけでも澄み渡ったならば嘆くことはないの」と詠っている。仏教語の「心水」という言葉を用いて、自分の濁っている「心」を表現し、それを清く澄ませることによって悟りを求めようとする菩提心が詠まれている。

ここまで、『続門葉和歌集』に見られる「身」と「心」の歌を見てきた。「身」で多く見られた「憂き身」という表現は、「心」の歌では、「心うき」(732)、「心ほそし」(774・946)、「迷ふ心」(921・967)、「心の闇」(937)とさまざまに表現される。一方、「心はれぬ」(927)、「清きこころ」(930)、「こころ清見」(933)など、「身」の歌にはあまり見られなかった、晴れ晴れとした心境が詠われていることは、「身」とは異なる詠み振りといえる。また、釈教歌においては、「心」が多く詠まれているにもかかわらず、「身」とともに詠まれた歌は一首しか見られない

ことも、一つの特徴といえよう。

三 即身成仏の歌

勅撰集において、「成仏」を題にして詠まれている歌は九首⁽⁸⁾ある。そのうち二首が、「即身成仏」の歌であり、『詞花和歌集』（一一五一年頃）と『千載和歌集』（一一八八年頃）に一首ずつ見られる。勅撰集以外の歌集を見ても、僅かに六首⁽⁹⁾を数えるのみである。ここでは、勅撰集の二首を中心に、「即身成仏」の歌を解釈してみたい。

即身成仏といふことをよめる

読人不知

露のみのきえてほとけになることはつとめてのちぞしるべかりける

（詞花集・卷十・雑下・412）

この歌は、『詞花和歌集』雑部に入集する作者不明の歌である。「露」は、涙や命に喩えられることが多いが、ここでは、はかない我が身に喩えている。類歌としては次の歌がある。

寿命無数劫久修業所得

ながきよにいかにつとめておきければやがてきえせぬ露の命ぞ

（法門百首・47）

「置く」「消ゆ」は「露」の縁語であり、「つとめて」には、早朝と修行との意が掛けられる。この歌では、修行によって永遠に消えることのない不滅の我が身の獲得を願っているのである。

先に見た「露のみの」の歌でも、やはり「つとめて」に両方の意味が掛けられているが、当該歌では「露の身」が消えることよって成仏することが詠まれており、「ながきよに」の歌とは別の発想といえる。「きえて」は、「即身成仏」が題であることから、死ぬという意味ではないだろう。生命のはかなさが無くなること、すなわち無常の世から抜け出すことと解したい⁽¹⁰⁾。歌の意味は、「露のようにはかないこの無常の身が、消えて仏になると

いうことは、真言密教の修行をした後に真に知るべきであったのだ」となるだろう。

次に、『千載和歌集』の歌を見てみる。

即身成仏の心を

(千載集・卷十九・釈教・1218)

てる月の心の水にすみぬればやがてこの身にひかりをぞさす

この歌の作者、藤原教長(一一〇九―?)は、法名を観蓮と言ひ、高野山に入山している僧侶でもある。『千載和歌集』に收められたこの歌は、『久安百首』(288)と『教長集』(851)にも見られ、『久安百首』では『秘密莊嚴即心成仏』、『教長集』では『秘密莊嚴、即身成仏』という題が付されている。『久安百首』に「即心」とあるのは誤写であろう。また、当該歌は、『教長集』の題から分かるように、もとは『十住心論』の「秘密莊嚴心」の教理を詠ったものと判断される¹⁾。

「心の水」は、先に見た『統門葉和歌集』釈教歌(939)にも見られたが、仏教語の「心水」という言葉を踏まえたものである。ただ、この歌の場合は、心の染浄や水の清濁を表現しているのではなく、仏の慈悲を受けとめる人の心を、水に喩えたものと思われる。この「心水」については、『即身成仏義』に次のように見える。

加持とは、如来の大悲と衆生の信心とを表す。仏日の影衆生の心水に現ずるを加といひ、行者の心水よく
 仏日を感じるを持と名づく。行者もしよくこの理趣を観念すれば、三密相應するが故に、現身に速疾に本有
 の三身を顕現し証得す。故に「速疾に顕わる」と名づく。常の即時即日のごとく、即身の義もまたかくのご
 とし¹²⁾。

傍線部にあるように、太陽の光のような仏の姿(教え)が、衆生の心の水に姿を現すことを加と言ひ、行者の心
 の水に現れ出た仏の姿を観じることを持つと言う。この真理の趣を観念したならば、身口意の三密が和合し、速や

かに悟りに到達できるといふ。

この『即身成仏義』の教理は、「即身成仏」を詠んだ「てる月の」の歌の世界にも通じる。仏の姿（教え）を、陽光ではなく月光に喩えている。第四句「やがて」は、「そのまま」「直ちに」「そのうちに」などの意味があるが、『即身成仏義』の「速疾」と対応させるならば、「直ちに」であろう。従って歌の意味は、「月光のような仏の姿（教え）が行者の心の水に住み、心が澄み渡ったならば、直ちに行者の身体に光が差し込むことよ」となる。澄み渡った心と、光り輝く身体が解け合った姿が詠われており、まさに「即身成仏」を表している歌と言える。

おわりに

本稿では、僧侶の和歌に見られる「身」と「心」の歌を考察し、併せて勅撰集に入集する「即身成仏」の歌二首を解釈した。元来、「身」とは人間にとつて確たる存在を持つ物体である。外界にさらされるものであることから、多分に社会性があり、その人自身の身の上、地位も我が身を相対的にとらえることで認識するに至る。一方、「心」は身体の内面にあり、実体を持つものではないが、表面からは理解できない人間の感情や意志など、あらゆる精神活動を言う。両者は、「身」という入れ物に納められた「心」という関係にあるが、実体を持たない「心」は、時にこの「身」から抜け出し、時空を超えることも可能であり、何にもとらわれない自由さを持つ。和歌においても、「身」と「心」という用語は古来から使われており、現在の境遇（身）と精神の自由（心）との対立など、しばしば対概念としても用いられてきた。今回考察した『続門葉和歌集』も例外ではなく、「身」と「心」という歌語が多く見られたが、この歌集の特徴としては、全ての歌が世俗を離れて生活する僧侶たちが詠んだものであるという点であろう。俗塵を厭離し、自由になった「身」という立場から、あらためて「身」や

「心」を詠み込んでいる。

「即身成仏」詠においては、澄み渡った心の水と、光り輝く身体が、一首の中で解け合っていた。ここには、「身」と「心」の背反という二項対立は見られない。自己の「身」や「心」を見つめる修行によって得られた「心身一如」の境地であり、それはまさに悟りの世界そのものと言えるのである。

註

- (1) 新日本古典文学大系『古今和歌集』（岩波書店、平成元年二月）所収のものに拠る。
- (2) 和歌の引用は全て『新編国歌大観』所収のものに拠り、歌番号等は（ ）内に示した。
- (3) 『明恵上人伝記』（講談社〈学術文庫〉、昭和五十五年十一月）所収のものに拠る。
- (4) この高雄法語の典拠として、拙稿では、興教大師覚鑿（一〇九五—一四三三）の『五輪九字明秘密釈』を指摘した（『西行和歌観の一考察——密成仏思想とのかかわりを求めて——』『佛教文学』第二十三号、平成十一年三月）。
- (5) 西行晩年の和歌観が形成された思想的背景については、前掲注（4）拙稿において、覚鑿の一密成仏が踏まえられていることを論じた。この和歌陀羅尼観は、西行に留まらない問題であり、今後も取り組んでいきたい。
- (6) 例えば、無住（一二二六—一三二二）の『沙石集』に「日本ノ和歌モ、ヨノツネノ詞ナレドモ、和歌ニモチキテ思ヲノブレバ、必感アリ。マシテ佛法ノ心ヲフクメラシムハ、無陀羅尼ナルベシ。」（日本古典文学大系）と見え、心敬（一四〇六—一四七九）の『さ、めごと』には「本より歌道は吾が國の陀羅尼なり。」（日本古典文学大系）とある。因みに、八代集における「身」の割合は約七％、十三代集では九％弱である。ただし、『続門葉和歌集』と同時代の勅撰集である『新後撰集』が一・二％弱、『続千載集』と『続後拾遺集』が約一〇％と高い割合になっている。二条為世（一二五〇—一二三三八）が撰じた歌集に多く採られる傾向にある。
- (8) 早くは、『金葉集』二度本に『法華経』「提婆品」の「竜女成仏」（79）が詠まれ、その他、『詞花集』に「願成仏道」（413）、『新勅撰集』に「草木成仏」（579）、『続拾遺集』に『法華経』「如来寿命品」の「我実成仏已来久遠」（1358）、『二乗成仏』（1383）が詠まれ、『新後撰集』に『円覚経』の「始知衆生本来成仏、生死涅槃猶如昨夢」（687）、『続千載集』に『法華経』「授記品」の「於未來世咸得成仏」（947）が詠

身と心の歌

まれる。

(9) 『千載集』の教長詠は、『教長集』『久安百首』にも見られる。その他の歌は以下のものである。

即身成仏

この身にてひかりをささむささじともころひとつに
ありあけの月 (広言集・99)

即身成仏を

法印成嚴

おろかなる身をあらためぬかたちこそやがて仏のすが
たなりけれ (安撰集・釈教上・417)

九条殿下御所参勤して醍醐座主僧正証憲あひとも
に御物がたりを申しはべりけるに、鏝也は安養郡
卒之間何をねがふぞと殿下仰ありしかば、よめる
いつもわがみそちばかりのこちしてまことのゆくへ
しる人もなし

即身成仏自称証人難有くやと僧正はべりける

(露色随詠集・480)

知我心者、即身成仏

たのめただ消えにし露の身なりともおなじ姿の池の蓮
ば

不動は、諸仏の蓮花座を、わが行者のためにい
ただきに先おきて、仏になさんと

(雲玉集・557)

(10) 「消ゆ」については、新日本古典文学大系『金葉和歌集
詞花和歌集』(岩波書店・平成元年九月)脚注において、

(11) 「罪ある身が消滅すること、即ち罪が消えるの意」とする
が、この「即身成仏」の歌からは罪障意識が感じられない。
その他、秘密莊嚴心を詠んだ歌には次の二首がある。

秘密莊嚴心の表徳門の心を 読人不知

わけすぎしよものこずゑもひとつ色にたかねはなを
もらさでぞ見る (統門葉集・卷十・釈教・922)

秘密莊嚴心の心にて生死即涅槃といへる事を

法印頼瑜

世の中をいとふうつつもゆめなればさながらゆめぞう
つつなりける (統門葉集・卷十・釈教・924)

なお、頼瑜の和歌については、拙稿「頼瑜僧正の和歌につ
いての一考察」(頼瑜僧正七百年御遠忌記念論集『新義真
言教学の研究』大蔵出版、平成十四年十月)、同「頼瑜の
学問と和歌」(佐藤彰一氏・阿部泰郎氏編『中世宗教テク
ストの世界へ』名古屋大学大学院文学研究科、平成十五年
三月)において、「一心」との関わりから論じた。

(12) 勝又俊教氏編修『弘法大師著作全集』第一卷(山喜房佛書
林、昭和四十三年四月)所収のものに拠る。

〈キーワード〉身と心、心の水、『統門葉和歌集』